

市長の窓

しげ のぶ  
滋宣の

はつ ちゅつ かん



イコスト  
小糸織一さん

あん ちゅつ めい

“忙中閑あり暗中明あり”

その 27

～ 衣被～

先日、里芋を、ガーリックオイルにアンチョビを入れ、能代商業高校「能商直営店あきんどう」で作っている「白神のねぎ塩だれ」を加えたタレで食べましたら、絶品でした。

ご承知のとおり、里芋は茹でても、蒸しても、皮が簡単につるっとむけます。

平安時代以降、高貴な女性は外出するときに、小袖を頭からかぶって顔を隠すのが習いで、その姿に似ていることから、里芋のことを衣被と呼ぶようになったそうです。

かぶることを古語で「被く」といい、本来は「きぬかずき」というべきところですが、「きぬかつぎ」と音変化しました。

それにしてもなんとも奥ゆかしい名前がつけられたものと感心しますが、「芋煮会」も「きぬかつぎかい」とでも呼べば上品に、と思いますが、庶民の解放感あふれる食欲の秋の代表では無くなりりますよね？

子にうつす ふるさとなまり 衣被 (石橋秀野)

能代市長 齊藤 滋宣

き  
走  
しま  
した。  
10月16  
きみ  
10ま  
。お

